二〇一九年三月一九日（参加者二〇名）

彼岸寺納め草履に力士の名　小袖
古墳守る木立姦し春の風　小袖
春風に炎の尖る和らふそく　小袖
鶯の聞いて聞いてと道すがら　小袖
珠のごと雨滴を零すしだれ梅　せいじ
羨道を半ば濡らしぬ春の雨　せいじ
春雨の水輪をひろげ池静か　せいじ
耳寄せて春の調べや鎖樋　せいじ
丹の橋へ天蓋なせる若緑　わかば
梅が香の広ごる丘の起伏道　わかば
雨晴れて山茱萸の黄の際立ちぬ　わかば
春雨に歪む池面の木々の影　わかば
梅匂ふ苑の一歩に戦没碑　うつぎ
観梅のをみなぺちやくちや憚らず　うつぎ
名物の蓮めし旨し彼岸寺　たか子
春の雨音なく落つる鎖樋　たか子
閻王と目のあひてより春寒し　なおこ
鶯の噂をすれば鳴きにけり　なおこ

六角堂直と閉ざしぬ彼岸寺　菜々
朱の欄へ枝垂れて幾重花あしび　菜々
紅の簪めける花馬酔木　葉月
観音の御手翳したる梅の丘　葉月
春雨に耳傾けむ鎖樋　ぽんこ
春陰の石の櫃を覗き見る　ぽんこ
根上りをふんはり包む春落葉　満天
身に入むや添木あまたに臥龍松　満天
甲山眼下に梅の丘匂ふ　有香
春昼やポップスひびくカフェテラス　有香
朱の欄に人垣なせる梅の丘　こすもす
囀に負けじと沢の高鳴りぬ　素秀
懐に石窟眠る梅の山　はく子
観音の御手伸ぶ方に囀れる　もとこ
紅白に青海波なす梅の丘　よう子
一灯に瓔珞揺らぐ朧かな　よし子

定例句会みのる選

二〇一九年三月一九日（参加者二〇名）